

## 350枚の表紙

池谷 和信 (いけや かずのぶ)

本館民族社会研究部

『月刊みんぱく』は、一九七七年一〇月に第一号が刊行されて、今回三五二号となった。この表紙は、前号までの三五〇冊の表紙すべてを刊行順に並べた。左上にあるのが第一号で、それから右に続き、二列目へと入る。三五〇号の夜這い棒は、右下に位置している。

こうして表紙全体を見ると、本誌の三〇巻の歴史について、改めて考えさせられる。変わらないものもあれば、変わるものもあるといったところか。まず下から二列目の右半分を除いて、民博所蔵のモノが選ばれてきたことでは一貫している。ときにはアップで、ときには背景をつけて紹介し続けてきた。どういいうわけか仮面や布が多く、色は茶系や赤系のモノが多いことが確認できる。

しかし、下五列目あたりから、「月刊みん

ぱく」のロゴが大きく変わるとともに、色使いが変わってきた。背景色を明るくしてモ



ノをきわだたせようということで、カラフルになつていく。同時に、インド映画のポス

ター(下から五列目)のように現代的なモノも増えてきた。そして、二〇〇四年の一年間(下から二列目)は、特集テーマに関係した日本各地の風景が紹介されている。モノが続いてきたなかで、太陽の塔がいかに衝撃的であったことか。その後、再びモノにもどっているのがわかる。

これまで編集委員会では、地域のバランスや展示会に合わせて、見どころのひとつを表紙にしてきた。表紙の変遷は、民博の展示の歴史を語っているのかもしれない。わたし自身でいえば、表紙の解説を書いた三冊に対してはとりわけ思いが深い。南アフリカの街でそのモノを収集したときのこと、改めてモノについて知らなかったと気づかされたことを思い出す。読者のなかにも、心に残る表紙がきつとあるのではないだろうか。